

---

# 交わる無限の愛色世界～テイルズオブエクシリア～

月詠輝夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交わる無限の愛色世界〜テイルズオブエクシリア〜

### 【Nコード】

N9119X

### 【作者名】

月詠輝夜

### 【あらすじ】

本編のその後のお話です。  
時間軸はバラバラ。  
子供設定があったり。

同じくサイトと重複投稿。

本編です↓<http://ncode.syosetu.com/n0683x/>

チャットです↓  
http://ncode.syosetu.com

## 永遠の愛を誓おう

一歩、

また一歩、と

わたしは幸せに

近づくんのだ――

あれから、アルフレドからプロポーズを受けて一年と七ヶ月が経った。会えない日は続いたけれど、左手の薬指にある婚約指輪がわたしの寂しさを和らげてくれた。そして今日は――

「ふおお……！！ヴェリテ、めっちゃ綺麗……！！」

「素敵です…！」

「本当にお美しい」

『や、やめてよ、みんな…!!』

「ほら、ヴェリテ。主役が遅れちゃ意味ないでしょ！」

主役、と言われて顔の熱が上がる。今日は、わたしとアルヴィンの結婚式、なのだ。彼の仕事が落ち着いたのが丁度一ヶ月前。それからわたしは再びプロポーズを受けて、今に至るわけで。正直二十歳になる前に結婚するなんて、というか、わたしが結婚するなんて思わなかった。

「アルヴィンさんには勿体ないですね」

「ほんとだよね!! あーもう、だけど羨ましいよ、ヴェリテ！」

みんなはわたしのウェディングドレス姿を見てたくさん褒めてくれる。

『や、あの、でも…やっぱりこれ、ちょっと胸強調されすぎ…っ』

ジュードに手を引っ張られながら言えば、大丈夫だよ、安心して、と満面の笑みで言われた。あの、いったい何に安心すればいいんですか。

「ほら、しゃきつとして！あ、ちょっと髪乱れてる。待ってね…はい、出来た」

『お母さんか』

相変わらずのジュードに笑顔が零れる。因みにまだこの姿はアルフレドに見せていない。だから余計にドキドキしている。でもジュードたちのおかげで少しだけ自信が持てた。

「では参りましょうか、ヴェリテさん」

『うん、ローエン』

わたしには親がいないから、代わりにローエンが隣で歩いてくれる

ことになったの。

小さな教会の扉の前、そこにわたしは立っている。緊張して、きゅ、とローエンの服を掴めば、優しい笑みを向けてくれる。そしてその扉が開かれると、ふわり、とたくさんの花が舞い落ちてきた。その先に見えるのは、愛しい人の背中。バージンロードの両側にはジュードたちの姿。恐れ多くもガイアス王までが来てくれていた。あの人暇なのかしら、とか思っていない思っていない。

「さ、腕を組んで」

『は、はい!』

ぼーっとしていたわたしはローエンに促され、慌てて彼と腕を組む。そしてバージンロードをゆっくりと歩いてアルフレドの元へやって来る。振り向いた彼はいつもと雰囲気違っていて、ドキッ、と胸が高鳴った。

「ヴェリテ、か…?」

『ア、ルフレド…?』

いやいや、なんでお互い確認し合ってるんだ。目の前にいるのは紛れもなく彼だというのに。だってかっこいいんだもの。ほう、とお互いが見惚れていると、ローエンがわたしの腕をアルフレドの腕と絡ませた。

「お二人とも、惚けは後にして下さいね」

『ロ、ローエン…っ』

「っ…行くか」

なんとなくだけど、彼からも緊張が伝わって来ている気がする。わたしは小さく頷いて、祭壇の前まで歩く。そしてオルガンの音に合わせて、祝福の讃美歌を合唱し、続いて祭司も兼任してくれたローエンによって聖書が朗読される。最後に夫婦の教えが述べられると、ローエンはわたしたちの前に歩み寄り、まずアルフレドの方を見やった。

「あなたはヴェリテさんを妻とし、病めるときも、健やかなるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」



「誓います」

思えばアルフレドを好きになるまで、いや、実際にこうなるまで結婚するなんて思わなくて、ただ彼の傍にいられたらって、ずっとそう思っていた。

「あなたはアルフレドさんを夫とし、病めるときも、健やかなるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

『はい：誓います』

人を疑い、信じなかったわたしが、あなたに出会って、恋をして、そしてこうやって結婚式を挙げている。夢のようだったけど、夢じゃない。

次に指輪交換。この指輪は、愛と真心と変わらぬ貞節の誓いであるしるし、とお互いがお互いの指に、結婚指輪を嵌めた。キラリと光るお揃いの指輪に自然と頬が緩む。そして――

「では、誓いの口付けを」

そう言われて、わたしとアルフレドは向き合う。彼はわたしの顔にかかったヴェールを取ると、少しばかり頬を染めた。

「綺麗だ、ヴェリテ」

『アルフレドこそ、今日は一段とカッコいいわ』

そ、とアルフレドはわたしに頬に手を添える。わたしを映す彼の瞳。吸い込まれそうで、愛おしい。改めて思わされる。ああ、やっぱりわたしはアルフレドを愛しているんだ、って。

「愛してる、ヴェリテ」

『わたしもよ、アルフレド』

口付けと共に、わたしたちを祝福するように教会の鐘が鳴り響いた。今、ここに一生の愛を誓う。

——ねえミラ、見てる？わたし今すごく幸せよ。ミラが守ってくれているこの世界があるから、わたしは、わたしたちはここに存在していられる。

こそ、と、続きは夜な、と言われたのは幻聴でしょうか。いいえ、彼の含んだ笑みが幻聴ではないと物語っています。わたしは顔を真っ赤にして顔を背けた。ジュードママに後で殴ってくれるよう頼もうかしら。

「お二方とも、手を」

証書に署名をした後、ローエンに言われて手を重ねる。彼から祝福をもらった後、わたしたちは初めてみんなの方を振り返る。わたしはアルヴィンの腕に手を添えて、にっこりと笑った。

「おめでとう！！」

みんながたくさんのお祝いの言葉をくれた。すごく、すごく幸せだった。余談だけど、ブーケトスはジュードが受け取ったとか。

永遠の愛を誓おう

——今までもこれからも  
ずっとあなただけを愛します——

結婚式ってこんな感じですか？↑

取り合えず流れと内容だけ教えてもらって自分なりに書いてみたんですけどぐだぐだしすぎですね、はい…

気に入ってくださいれば嬉しいです！

披露宴は…まあ書けたら書きます↑

間違っているとかなどあれば指摘してくださいませ、はい切実にm（

——）m↑

**A  
r  
e  
  
y  
o  
u  
  
h  
a  
p  
p  
y  
?**

みんなにお祝いされて

今までにないくらい、

すごく幸せです――

結婚式が終わった後、披露宴なるものがあるということで、わたしたちはその会場に来ていた。席に座ると、ローエンから開宴の言葉があり、次いでジュードからわたしたちのプロフィール紹介があった。まあちよつとアルフレドの扱いが酷かったように思えたけど、でもそれはそれでジュードがいかにわたしたちのことを思ってくれてるのが感じられた。

次に主賓からの祝辞で、わたし方はまだ二年くらいしか一緒に仕事をしていないけど、 balanさんが、アルフレドの方は、ユルゲンスさんが色々話をしてくれた。普段聞けてない仕事の話とか、恥ずかしながら惚気話を暴露されたりして、お互い顔を真っ赤にしていた。

「お二人とも、ケーキカットですよ」

そう言われてハツとする。気付けば周りにカメラを構えたみんながいて少しビクツと肩を跳ねさす。

『じゃ、じゃあ、行きます！』

ナイフを持っていたアルフレドの手に手を添えて、わたしたちはケーキにナイフを入れた。ってかこれどこまで入れんの？と迷って彼を見やれば、ピタリ、と真ん中くらいでそれを止めた。そしてそのまましばらく写真をパシャパシャと撮られ、それが終わると何やらレイアが満面の笑みでわたしたちにフォークを差し出してきた。

「何？」

「何ってファーストバイトだよ！」

『ファ―…何？』

「知らないの？お互いがケーキを食べさせあうの！」

えっと、つまりそれは、あーん、と言う意味ですかレイアさん。分かったような表情をしていれば、それを押し付けられるわけで。

『え、ちょ、レイア！』

「ほらほら！」

早く早く、と背中を押されてケーキの元へ戻ってくる。ちら、とアルフレドを見れば、なんかめっちゃいい笑顔してるんだけど。彼はレイアからフォークをもらうと、一口サイズの大きさにケーキを切った。

「ヴェリテ」

『！ や、あの…でも、人前…っ』

「いいから」

悪戯っぽく笑うアルフレド。どうやらわたしに拒否権はないようで。顔を林檎のように真っ赤にして、わたしはおずおずと口を開ける。

「あーん」

『あ、あーん…』

恥ずかしいから目を瞑ると、むぐっ、と口の中に甘いのが広がった。しかし、口いっぱいにケーキを詰められた様で、わたしは慌てて口に手を当てる。

『っな、何するのよ!!! ってかさっき一口サイズだったじゃないの!!!』

頑張って飲み込んでそう怒鳴れば、急に近づいてくるアルフレド。そのまま口元にキスされてわたしはその場に固まった。



「ちそうさま」

どうやらクリームがついていたらしい。彼は自分の唇についたクリームを舌で舐めとり、ニヒルに笑う。

『ジュードママ』

「うん、任せてヴェリテ」

「え、ちょ、待てって！これはほんの冗だ……——ツツツツ！！！！！」

アルフレドの悲鳴にならない声が響く。勿論会場みんなは半眼で彼を見ていた。

『はい、あーん』

「……ヴェリテさん、なんの冗談ですか」

やっと落ち着いた頃、わたしからのファーストバイト。ギリリ、と光るナイフの切っ先のにカッとしたケーキをぶっ刺して彼に差し出すわたし。それを見て口元を引き攣らせるアルフレドを余所に、わたしは満面の笑みでいる。

『え？ 仕返し』

「仕返しにもほどかあるだろ！！！俺の口の中真っ赤になっちゃうよ！？」

『わたしの案じゃなくてジュードの案だからね』

「ジュード君！？」

バツとジュードを振り向くアルフレド。冗談なのに、と言えば彼は冷や汗を垂らして苦笑する。気を取り直してわたしはフォークにケーキを乗せ、彼に差し出した。

『あーん』

笑って言えば、アルフレドは僅かに頬を染めて、ぱくつ、とケーキ

を口に入れた。なんかこっちまで恥ずかしいな、これ。

「では、お二人の幸せを願って、乾杯！」

そしてようやく乾杯。色々なところでグラス同士がぶつかり合う音が聞こえる。こんなにも祝福されて、今にも涙が出てきそうだったが、折角お化粧も直したことだし、ぐっと堪えた。

「乾杯、ヴェリテ」

『うん、乾杯』

わたしたちは改めて乾杯して、グラスに入ったワインを流し込んだ。少し苦みのある、でも甘く後味のいいそれに、おいしい、と言葉が漏れる。そう言えばワインは初めて飲む。いや、未成年なんだけどね。

「ヴェリテっ！」

食事が始まる中、真っ先にエリーがわたしの元へ来てくれた。少し髪も背も伸びて、さらに可愛くなった彼女をわたしは笑顔で迎える。

『相変わらず可愛いわ、エリー。そのピンクのドレスも素敵よ』

「そ、そんなっ…ヴェリテに綺麗さには負けます。とっても綺麗ですよ」

ああもう、エリーほんとに天使。思えば一番最初に心を開いたのがエリーだった。同じ境遇だったはずなのに、エリーはちっとも村の人たちを嫌ってなくて、そんな彼女の優しさにわたしは感謝している。

「アルヴィンは相変わらず風紀を乱しますね！」

くる、とアルフレドの方に向いた彼女は眉を潜めて言う。どうやらさっきのファーストバイトのときのことを言ってるらしい。

「こんなときくらい許せよ、エリーゼ」

「こんなときだからこそです！少しは節度を保ってください！！じやないとヴェリテに嫌われますよ」

『あはは、エリー、言うようになったわね』

「えへへ……ヴェリテ、アルヴィン、お幸せに、です」

ティポが離さなくなってからもう一年以上が経つ。旅していたころを思い出すと寂しくも思えてくるが、でもエリーの成長は心から嬉しい。親までとはいかないけど、姉として、かな。

それから今度はローエンがやって来た。

「ご結婚、本当におめでとうございます。まさかお二方の式である大役を任せていただけるなんて思ってもみませんでした」

『こっちこそ、受けてくれてありがとう、ローエン』

「助かったぜ」

「いえいえ。ジジイでもお役にたてたのなら光栄です。私はいつもお二人の幸せを願っております」

そう言ってローエンは優しげに笑った。彼は本当に素敵な大人だと思う。わたしが知る限り、どんな時も冷静で、それでいて確りと前を向いていて。二十年前のことがあったからこそなのかもしれない。次に軽やかな足取りでやってきたのはレイア。

「あーもう!! ほんとアルヴィンには勿体ないよね!!!」

「おい。来ていきなりそれかよ」

「だってわたしがもらっちゃいたいくらいだもん!」

腰に手を当てて、ふんっ、と鼻息を拭くレイアに、小さく笑いが漏れた。

『やだレイア。その気ならいつでも行くわよ』

「ヴェリテ：VV」

「冗談ってわかっててもお前らの目は本気だから怖エよ!!」

レイアはいっつも元気でわたしまで笑顔になっちゃう。こういうノリのいいところも好きだし、なんせ結構趣味もあう。姉妹ってこういう感じなのかな。

「ヴェリテ、幸せになってね！」

『ありがとう、レイア』

満面の笑みで言ってくれるレイアに、わたしも笑顔で返した。

レイアを見送った後、肩を叩かれたわたしが振り向けば、そこにはジュードがいた。

「おめでとう、ヴェリテ、アルヴィン」

「おう」

『ありがとう』

ジュードは、そうね…相変わらずお人好しだけど、でも自分のことのようにわたしたちの結婚を喜んでくたり、結婚式の準備も手伝ってくれたみたいで、すごく感謝してる。

「ほんとに綺麗だよ、ヴェリテ」

『ジュード…』

「おいこらときめくなヴェリテ」

ジュードの柔らかい笑みにキュンとすると後ろから会えルフレドに頭を掴まれた。痛い。痛いですアルフレドさん。

「もう、アルヴィンは相変わらずなんだから！！ヴェリテ、嫌になつたらいつでもおいで」

「優等生もなんでそんなこというのかね…」

『あはは、考えとく』

「そこ否定しないのかよ！？」

慌てるアルフレドをみてわたしとジュードは顔を見合わせて笑った。



それからガイアスや、 balanさんや、 ユルゲンスさん、それにドロ  
ッセルも来てくれてすごく嬉しかった。一番来て欲しかった人には  
来てもらえなかったけど……ほんとに、ほんとに幸せな一日だった。  
たくさんお祝いしてもらえて、たくさん笑顔をもらって、わたし、  
すごくs 幸せだ……

「泣くなよ、ヴェリテ……」

『うん……うん……』

溢れた涙が止まらなくて、そんなわたしの涙をそっと彼が拭ってく  
れた。

「これからもっと幸せにしてやるから」

『っばか……』

頬に触れている彼の手にそっと手を重ねて小さく笑う。ああでも、  
これ以上幸せになったらどうにかなっちゃいそうな気がしてきた。

A r e y o u h a p p y ?

——これから先何があっても

わたしはあなたと共にありたい——

披露宴ってこんな感じですか↑

なんか、あの、アル憫になってるようになってないようなw

取りあえずアルヴィンごめん^p^p^

ファーストバイトは暖笑からの提案(?)

ちゃんと意味があるみたいなのでやったらいい感じだと助言を頂きました……でも、うん、ごめん、なんかふざけてますね、そこ↑

次はリクエスト頂いたものを更新していけたらいいなと思ってます

^^

頑張りますね＼(^o^)/↑

間違っているとかなどあれば指摘してくださいませ、はい切実にm(

——)m

**H a p p y H a l l o w e e n ! ?**

お菓子くれないと

悪戯しちゃうぞ！

……されちゃった

「「トリックオアトリート!!」」

そんな楽しそうな声でわたしは目覚める。まだ重たい瞼を開けて目に入っただのは奇妙な格好をしているレイアとエリーゼ。

『いや、可愛いけど…何?』

「ヴェリテってばハロウィン知らないの!？」

わたしは頷く。聞けば地霊小節の末にある行事だとか何とか。わたしはそういうイベントに関する本は読んだことがなかったのだから無知なのだ。

「こうやって仮装して、お菓子くれないと悪戯するぞー!、って他所の家を回るんだよ」

『成る程』

レイアは魔女、エリーは小悪魔の仮装らしい。ってか久しぶりに会ってそれですか。それよりまだ辺り暗いんですけど。わたし寝たの一時間前じゃん。

「ヴェリテ、お菓子頂戴、です!」

『うーん、悪いけど持ってないのよね…』

ごそごそ、とポーチの中を漁るが飴玉ひとつない。すると二人が一斉にわたしに飛び掛かってきた。

『ぶっ!?!?』

わたしはベッドに押し倒され、ニヤニヤと笑う二人に口角を引き攣らせる。

『な、何を…』

「お菓子くれないと悪戯です!」

「だからヴェリテ、大人しく犠牲になってね!!」

『ひ…っ、うわあああああ!?!?』

——無理矢理二人に服を脱がされて、何故か包帯をぐるぐると巻き付けられた。二人曰くミイラ女ならぬ包帯女だというのが、これは些か、いや、かなりヤバいんじゃないのか。

『やだやだやだだ！！こんな格好で出ていくなんていやああ！  
！！！！』

わたしは引き摺られてミウたちがいる部屋へと向かっている。

「お菓子くれなかった罰です！ほら、ヴェリテっ！」

『エリー―あなたは悪魔か！！』

「小悪魔です」

『それは仮装の話でしょうが！』

いくらわたしが叫んでも二人は止まってくれなくて、結局部屋の前に来てしまったわけで。

「アルヴィンもいるよ、ヴェリテ」

『なんのイジメ！？や、ちょっ、レイアっエリーっ』

静止の言葉も聞かず、レイアとエリーは部屋の扉を開ける。そこにはジュードとローエン、そしてアルフレドがいた。ジュードは目を見開いて持っていたフォークを落とし、ローエンは髭を撫でながら笑っていて、アルフレドは顔を真っ赤にして口を開閉していた。

『っだから嫌だったのにィ!!』

バツと顔を手で隠し、わたしはみんなに背を向ける、いや、向けちゃダメだ。今のわたしは体のラインがハッキリしてるし恥ずかしい。恥ずかしいってもんじゃない。

女としての恥じよ!! こんな露出の高い服着たことない…服って言えないけど!

「帰っちゃダメです!」

「ほーら! みんな待ってたんだからっ」

『いーやーだーっ!!』

必死に壁にすがりついて抵抗する。みんなの、しかもアルフレドの前でこんな格好とか有り得ない。死んだ方がまだ。

「ちょっと、アルヴィンもなんか言っちゃってよ！」

『レイアーっっ!!』

半泣きでアルフレドを見れば、じっとわたしを見、やがて口を開く。

「ナイスレイア」

『この屑!!!!!!!!!!!!!!』

さっきまで真っ赤になってた癬になんなのあいつ。もう泣きたい。ジュードママ助けて。…とか思ってたら、ジュードママがコートをかけてくれた。

「みんな、ヴェリテをいじめちゃダメでしょ？」



その言葉にみんなは大人しくなる。わたしは嬉しくなって思わずジュードに抱きついた。

『ジュードママ!』

「ママじゃないって!! ってかヴェリテ、ダメだって!」

『!?! っ!?!』

咄嗟に自分の格好を思い出して慌てジュードから離れた。その瞬間、アルフレドに担ぎ上げられて、わたしは自室へと連れていかれる。

「あーあ、やっぱりそうなっちゃう?」

「レイアさんもエリーゼさんも、ヴェリテさんはもうご結婚なされているのですからほどほどにしなければいけませんよ?」

「でもヴェリテはあれが似合うと思ったんです!」

「ってかヴェリテ:食べられちゃう?」

「ぼ、僕の所為...?」

一瞬の出来事だったため、わたしは暫くキョトンとしていた。ハツとしたのはベッドに押し倒されてからだった。

「トリックオアトリート？」

『……………』

「Trick or Treat？」

『……………いや、発音良く言っても……………っ』

きつと今のわたしは耳まで真っ赤なんだろうなと思いつつ、彼から目を反らす。アルフレドはわたしの首筋に顔を埋めて、厭らしくそこを舐める。

『や、は…っあ、ん…っ』

ビクッ、と身体を跳ねさせると、次いで舐めた首筋に強く噛み付く

アルフレド。

『痛っ!?! な、につするの…っ』

僅かに血の臭いがした。

「……………優等生に抱きついた」

『…嫉妬?』

「悪いかよ…っ」

噛み痕を舐められ、ピリツ、と痛みが走る。彼の舌はそのまま首筋から鎖骨まで下りてくる。

『や、っちょ…っ…!』

「折角レイアたちが誘ってくれたイベントだから我慢しようと思っ  
た……」

『ふあ、あ…、ひゃ…っ!?!?』

「でもあんなところ見せつけられたら我慢なんて出来ねえよ…」

『ア、ルフレ…ド……………っ』

「どうせお菓子持ってねえんだろ? なら悪戯させろよな」

ニヒルに笑う彼を拒否する術はわたしにはなくて、そのまま朝まで付き合わされました。

結局パーティもやれずじまいで、明日に繰り越されることになった。もちろんその日はちゃんとした仮装で出席したから。

Happy Halloween!?

もうあんな格好しないから…!

(ヴェリテ、ごめん!!)

(あははジュードが謝ることじゃないから…)

(で、でも…すごく疲れてるし…)

(気にしない気にしない。それより、久しぶりに集まったんだから

パーティー楽しもう？

(う、うん！)

イラスト描いててついでに書いたものゝpゝ

別にハロウィン夢でも何でもない気がする↑

取りあえずあんなふうになった経緯を、と思ったらいろいろと脱線しました：

時間軸は結婚して、家も決まってから、とか？

ふたりの家にみんなが押しかけてきてー、みたいなゝゝ

でもちゃんとアルヴィンには許可を取ってたり。

相変わらずぐだぐだ夢でしたm (┐┌) m

> i 3 4 0 1 3 — 4 0 6 1 <

2 0 1 1 . 1 0 . 2 9

月詠輝夜

## あなたの隣で

あなたの隣だから

わたしはいつも

笑顔でいられるんだ

広がる青空、吹き抜ける風、透き通ったエメラルドグリーンの海、  
白い砂浜。どれもがわたしの好奇心を擽る。今、わたしとアルフレ  
ドは休暇を取って新婚旅行、というものに来ている。ホテルの部屋  
から見える景色が何とも言えないくらい美しい。そう言えば旅が終  
わってから仕事があったり何かと忙しくてこんなにゆつくりした  
ことは無かった。

『素敵…!』

「お、気に入ってもらえた?」

実はと言えば私の仕事にキリがつかなくて、この旅行のことはアルフレドに任せていたのだ。失礼かもしれないけど、ちょっと不安だった。でも場所とか、ホテルとか、食事のメニューとか、全部素敵で恥ずかしながら子供のようにはいしゃいでいた。

「ヴェリテの好み、もう全部把握してるからなー」

『じゃあわたしが今したいこと、当ててみてよ』

振り返ってにっと笑えば、慣れた手つきでわたしの腰に手を回して引き寄せるアルフレド。

「キス、だろ?」

『正解』

どちらからともなくキスするわたしたち。結婚したら一緒に住もう、  
と言っていたのだが、わたしの仕事が意外と落ち着かず、今まで先  
延ばしになっていたのだ。だからこうやって会うのも結婚式以来、  
だった。

「あーもー、久しぶりにお前と二人つきりになれて幸せ……」

『ふふ、わたしもよ。ずっと仕事だったもの』

「仕事は落ち着いたのか？」

『実はまだ。でも balan さんが行ってきていいよ、って有給休暇く  
れたの……って、ここまで来てこんな話は嫌よ、アルフレド』

折角の新婚旅行だというのに仕事の話とはなんて花がないんだろう。  
口を尖らせれば、甘いキスの雨が降ってくる。

「分かってるよ。さ、オヒメサマはどこへ行きたい？好きなところ連  
れてってやるよ」

『ほんと！？じゃあ、まずは……』



それから一日目と二日目は色々なお店を回った。自分の欲しいものを買ったり、ジュードたちにお土産だ、と二人で悩みながら選んだり、ちよつと休憩、と小さなカフェでお茶したり。アルフレド曰くわたしは終始笑顔だったらしい。そういう彼もずっと笑っていたんだけど。

『海行こう、アルフレドっ』

「おふっ!?!?……朝から元気だなあ。ってかお前氣イ早すぎるだろ!」

次の日には海に行く気満々で早起きし、まだ寝ているアルフレドの上にダイブした。水着の姿で。

『あ、違う違う。サイズ確認しないで買ったから試しに試着してるだけだから、すぐ脱ぐ』

「もうお前、めっちゃ似合ってるし可愛いけどそれは誘ってるようにしか見えねえからな。ちょっとは自重してください！！」

『わたしは別に嫌じゃないけど？』

こて、とアルフレドの上からベッドに落ちて、唇に人差し指を当てながら言えば、真っ赤に染まる彼の顔。そんなこと言ってるわたしもきつと真っ赤なんだろうけど。

「っほら、海行くんだろ！？さっさと着替える！」

『(弱いなあ)』

なんとなくこれがお互いの弱点だと思う。わたしから迫れば彼が弱くて、彼から迫ってくればわたしが弱い。こういうところは似た者同士、なのかな。

それから海にやって来たわたしたち。そこにあった更衣室で着替えて、先に出て待っていたアルフレドと合流する。

「……ヴェリテ。さつきと違くね？」

『ああ、あれはこの下。だってあんな肌出てるの人前で着られるわけないじゃん』

笑って言えば残念そうに肩を落とすアルフレド。部屋で着てたのはビキニだけど今はパーカーと脛辺りまであるスカートを履いている。

「来た意味ないんじゃないの？」

『わたしはアルフレドと一緒に浜辺を歩くのだけでも嬉しいんだけどな』

「っ……お前には敵わねえよ」

苦笑いをして頭を撫でてくれる彼。今日は休みだからか、浜辺は昨日より賑やかだった。緩やかに揺れる海を見ながら、手を繋いでわたしたちは浜辺を歩く。吹く風がわたしの髪や頬を撫でて気持ちがいい。

「海、ヴェリテの瞳見たいだ」

『わたしの、目?』

「ああ。透き通っていて、それでいて綺麗な…でもエメラルドグリーンより淡い色……翡翠色、って言ったらいいか。その色、凄く好きだ」

トクン、と胸が鳴る。酷く優しい、わたしを見つめる彼の鳶色に引き込まれそうになる。そんな風にちゃんと瞳を褒められたのは初めてでなんだか不思議な気持ちだった。

「うん、俺、やっぱりこっちのが好きだわ」

『っえ…?』

「俺が攻めてヴェリテが真っ赤になる方」

アルフレドはピタリと足を止めてわたしを引き寄せる。幸い話してるうちに人気のない岩場まで来ていたのでわたしはそれを受け入れた。もぞ、と彼の胸にすり寄り、背中に手を回す。

『…ばか』

「朝の仕返し」

『…好き』

「知ってる」

チク、と首筋が痛んだと思えばキスマークをつけられていて、わたしはさらに真っ赤になった。

勿論新婚旅行で、同じ部屋に泊まってるため、その、夜の営みと言うのもありまして、四日目はぐったりとしてたわたしであった。今度から攻める時は気を付けないといけないと反省。でもこの一日はこれからのことについて色々と話し合うことが出来た。この旅行が終わったら本格的に引っ越しを済ませようと話したり、家具とか生活用品も揃えなきゃね、と笑ったり、時にはちよっとラブラブしたり。結構有意義な一日になった。

五日目はホテル主催のダンスパーティーがあるということで、是非参加してほしい、と殆ど未経験のアルフレドと朝から練習したりし

ていた。貴族だったアルフレドも少しは嗜んでると思ったのだが、二十年も前の話だ。

「覚えてねーよ…ってかほんとにダンスパーティー出んのか？」

『勿論！はい、続きね』

「はいはい、姫様の仰せのままに」

何だかんだ言いながらも飲み込みの早いアルフレドに感心する。ちよつと悔しかったから難易度の高い課題を、ひとりでやって、と彼に出した。

「え、むずっ！！……………これ、ヴェリテは踊れんのかよ」

『ええ。自分が出来ないものを課題として出すわけなくてよ』

見ててね、とわたしは出した課題を難なく踊って見せる。踊りは昔からの趣味だったから色んな本を見て独学だけど大体はマスターしていたりする。自分の口でリズムを刻みながら、全部踊りきった。

「はー：趣味でやってた割にプロ並みなんじゃねえって思うわ、ほんと」

『過大評価しすぎ。じゃ、次はアルフレドね』

「一気には無理だぞ」

『わかってるわかってる』

それから数時間、間違っているところは多々あったがなんとか最後まで通せたアルフレド。どうだ、と自信にいう彼が可愛くて小さく笑った。

「なんだよ」

『ううん、なんでも』

「：ちよつと休憩！お前といちゃいちゃしたい」

がぼつ、とベッドに座っていたところを押し倒されるわたし。ちよつとびっくりした。

「お前、ムカついたからあんな課題出したんだろ」

『おお、バレた』

「素直だな、おい。まあそんな素直なところも好きだけど」

言いながら厭らしい手つきで腰を撫でてくるアルフレドに一発肘打ちを食らわせた。見事顎にクリーンヒットして彼はわたしの隣で悶える。そんなつもりじゃなかったのに、偶然って怖い。

「酷くねえ？」

『あはは…』

それからもう暫く練習して、夜まではホテルの中を見回ったり、散歩に行ったりして時間を潰した。パーティは七時から。わたしはホテルから貸し出されているドレスに着替えて、長い髪は邪魔にならないように上で纏め、普段はしないお化粧も少しばかりする。首にはしっかりと彼にもらったネックレスをつけて準備を終わらせた。

「ヴェリテ」

『あ、アルフレドも終わっ…た、っ！』



振り向けば正装したアルフレドの姿があって胸が高鳴る。普段は固めている髪も今は下ろしていて、着ている黒を基準とした服もたくさん細かい装飾がついてあって自然と彼の雰囲気合っている。こういう格好もやっぱり似合う。ってか似合いすぎ。

『カッコイイ…』

「っ…おう…お前も、すっげー綺麗…」

『あ、りがと……』

なんだか恥ずかしくて顔を合わせられなかった。けどそろそろ時間だからそんなこと言ってる場合じゃなくて。

「行くか」

『うん』

わたしはアルフレドと共にホテルのホールに来る。あまり大きいと

は言えないそこには豪華な食事や飾りつけ、煌びやかな人たちがいた。ちよつと場違いじゃないかなど思ったけど、大丈夫、と彼が手を引いてくれて安心する。そして曲が始まると、次々にダンスを始める人たち。そんな中、彼がわたしに向き直り、その場に軽く跪く。

「姫、お相手願えますか？」

『！  
はい』

差し出された手に、自分の手を重ねた。

練習した甲斐あってか、わたしたちは息の合ったダンスをする。そしていつの間にかみんなから注目されて、思わず足を止めそうになったが、彼がリードしてくれた。

「このまま踊ろうぜ」

『え、でも…』

「いいから」

パーティー客が輪を描き、わたしたちはその中心でワルツを踊る。こんなこと滅多にないから恥ずかしかったけど、でもアルフレドと一緒にならなんとかなる気がしてそのまま踊り続けた。

やがて曲が終われば拍手の嵐が巻き起こり、びっくりしながらもわたしとアルフレドは顔を見合わせて笑った。なんだかちょっと幸せな気分。

——最終日は特にやりたいこともなく、部屋で一緒に過ごすことにした。でも時折何度か言葉を交わすだけ。彼の傍にいただけで凄く暖かいから、それだけで十分だった。アルフレドもそれを分かってくれているから、わたしは自然と笑えるわけで。

明日からは引っ越しの準備しなきゃな、と思いながら隣の彼を見れば、規則正しい寝息を立てて寝ていた。なんだかわたしも眠くなってきた、彼の肩に頭を預けて眠った。

あなたの隣で

わたしは笑う――

新婚、旅行…？↑

どんなものかよく分からなかったから、取り敢えず楽しかったらいいや、とガサガサ深夜に書きました（＾p＾）

まあ毎回のごとくベタベタなんどすけどねっww  
旅行先は、まあどっかのリゾート地でいいです↑

エメラルドグリーンの海とかダンスパーティーとか妄想乙ですね！  
でも書いてて楽しかったですし、いいですよ、ね？↑

わたしが書くふたりってラブラブなんですかね…

ラブラブ目指してるんですけど脱線しかけじゃないですかね、肘打ちとか（・ω・）

あ、ちゃんと家は決まってるんですよ、なかなか引っ越し出来ないだけ↑

…なんかもうこの旅行現代風みたくなってる↑

一応、リーゼ・マクシア、ですから

因みにエレンピオスとは合体？してたらいいと思うんです

シンフォニアみたくなえ^^

オチは相変わらずないです↑

次は何書こうかな（＾p＾）

あ、前話にイラストupしておきました（\*ノωノ）

2011. 11. 01

月詠輝夜

## ふたつでひとつの繋がり

ヴェリテが笑ってるなら

それでいいんだ…

いいんだけども……

ある日突然、ヴェリテがニ・アケリアに帰る、と言い出してきた。え、なにこれ、実家に帰りますとかそんなん？、とか、俺何かしたっけ？、とか不安になったけど、どうやら兄であるイバルに会いたいということだった。そういう結婚式の時も来なくて、コイツめっちゃ落ち込んでたよな。確か最後に会ったのは最終決戦の前だった気がする。あれからもう二年以上は経つ。

「で、何で俺も？」

『あら、嫌だったかしら』

クス、と笑って俺を見るヴェリテは二年前より少しばかり大人びた。髪も伸びて、髪形も変えて、服装も…ちよっとエロイ。って何考えてんだ俺。

「いや、俺が行ってもいいのかってこと」

『別に構わなくてよ。手紙にもあなたを連れて行くって書いておいたし』

「手紙ね…逃げてなきやいいけど」

そう言えば、ピタリ、と止まってヴェリテは俺を見る。何その顔。まさか考えてなかったとか。

『それ考えてなかった』

あーうん、やっぱり？っていうか可愛いんだけど。

『よしアルフレド！走るわよ！！』

「は、ちょ、おまつ！！待って！」

走っていくヴェリテを慌てて追いかける。相変わらず行動的だな、なんて思いながら前を走るヴェリテに追いついて持ち上げた。所謂お姫様抱っこってやつだ。

『うわっ！？ちょ、アルフレド！？』

「相変わらず色気ねエ声」

『ジャツジメント食らう？』

「すみません」

俺の下で鳴いてる時は可愛いのに。そう言えば的確に鳩尾に鉄扇をぶち込まれた。容赦ねえのも変わらないよな、ほんと。

で、ヴェリテを抱えて走って、ニ・アケリアまで来たわけだけど。



「巫子殿いねえな」

『わたしの家でしょ』

ああ、そう言えばそうだった、と思い出す。ヴェリテがあいつに自分の家を使ってもいいって言ったんだっけ。ヴェリテに家とか俺一瞬しか入ったことねえのに。

『ぶっさいくな顔』

「な…っ俺はいつもカッコイイでしょーよ」

『ふふ、うん、カッコいいわ、アルフレド』

にっこり笑って言うヴェリテに僅かに顔が熱くなる。もうほんと、俺にとったらヴェリテマジ天使。ってかそんなに不細工だったのか、俺。

『やっとなついた!』

ニ・アケリア参道から少し逸れたところに、ヴェリテの家があった。辺りはシンとしていて滅多に人が立ち入らない場所でもある。

ガチャ、とヴェリテはそつと扉を開けた。

『ただいま』

入ったそこにはちゃんとイバルがいて俺は目を瞬かせた。まさかいるなんて思っていなくて。

「あ、お、おう…」

『何それ！妹が帰ってきたのに素っ気なさすぎない！？』

「え、あの…お、お帰り…」

『うん、イバル！』

イバルは前とあんまし変わんなくて、逆に変わったヴェリテにビツ

クリしたんだろうな。二年前なんて胸元なんて出さなかったし、足だってあれだ：ニーハイブーツっての履いてて出さなかったし。あれ、俺変態じゃねえ？

「お前もそんなとこ突っ立ってないで入れよ」

「おーおー、ヴェリテの家なのに主気取り？」

「貴っ様…！」

『ふたりとも怒るよ？』

「「はいすみません」」

やっぱりイバルもヴェリテには弱いらしい。ほんとどっちが上か分かんねえよ。ちょっとは兄らしいとこ見せてやればいいのに。

『イバル、いつもこんなに綺麗にしてくれてるの？』

「ああ。お前に借りてる分際だからな」

『そっか、ありがとね』

すどん、とヴェリテは机の前に座る。俺も手招きされたのでヴェリテの隣に腰を下ろした。

『手紙、送ったと思うけど、わたしたち結婚したのよ』

「…ああ、来てた」

「ヴェリテ、お前が来てくれなくて寂しそうにしてたぞ」

「それは……わかってる。でも」

パン、と手を叩いてヴェリテがイバルの言葉を遮った。

『そんな話をするためにここに来たんじゃないよ』

「え…怒って、ないのか……?」

恐る恐る聞くイバルにヴェリテは優しく微笑んで頷く。正直俺も怒っているからこいつに会いに来たんだとばかり思っていた。

『会いたかったから、来たのよ』

「ヴェリテ…」

「……」

おいちよつと待て俺。なんでイライラしてんだ。こいつらは兄妹だろーが。それっぽい雰囲気だけど兄妹じゃねえかよ。

「あ、俺お前が来るって聞いて食事をだな……！」

『わあっ、本当！？嬉しいわ、イバル！』

「ちよつと待ってろよ！今すぐ持ってくるからな……！」

『あ、わたしも手伝うわ』

いや、ヴェリテは笑ってるからいいんだよ。兄妹のことに口出すなんて野暮なことはいない。

「ほらこれ、ヴェリテ好きだったろ？」

『覚えててくれたんだ!』

「当たり前だろ!俺を誰だと思ってる」

『ふふ、ありがとう』

くっそ。なんで頬染めてやがんだよ。確かにヴェリテは可愛いし笑顔とか天使だし気持ちは分からなくもないけど。あいつは妹に対して何頬染めてやがんだよ。あ、二回言っちゃった。

『アルフレド、ぶっさいく』

「Σそれ二回目!」

「だがヴェリテが言うくらい相当変な顔してたぞ、お前」

「お前らなあ……」

悔しくてふたりを睨み付けていると、何かに気付いたヴェリテが俺の元に来てこそつと耳打ちしてくる。

『嫉妬しなくてもわたしはアルフレドのことだけが好きだからね』

ずさっ！と顔を真っ赤にすれば、にやにやと笑うヴェリテの姿。俺はぐっと言葉を飲み込み、それから額に手をやって息を吐いた。

「何言っただ？」

『ふふ、イバルなら大体分かるでしょ』

「…はーん、さては俺とヴェリテのやり取りに嫉妬したな、ええ？」

「変なところでやっぱり双子だなおまえら！！！！つーかドヤ顔すんな」

なんでこいつにもバレたんだ、と深く肩を落とす。するとイバルが俺の向かいの席に着き、俺を見据えた。

「俺にとつたらヴェリテは特別だった」

「え…？」

「俺が一番、ヴェリテの傍にいた」

何故か急に真剣なムードになって俺はヴェリテと顔を見合わせる。  
なんだかヴェリテもおろおろしてるようだった。

「俺なんかより真っ直ぐで、一度決めたことは、絶対に諦めなくて」

『イバル…?』

「兄妹だから、双子だから、全部分かったつもりだった。けどヴェリテはお前たちと旅して、俺じゃ成し得なかったことを……人間嫌いを克服した。お前がいたから、なんだろう？」

ヴェリテと同じ翡翠のそれが俺を捕らえる。イバルの肩は小さく震えていた。そうだ、こいつはヴェリテと同じでプライドが高くて、なかなか人を認めようとしない。だがこいつは俺を……

「認めてくれるのか？」

「っだがいいか!?! ヴェリテを泣かせてみる!! その時はだな——」

『イバル』



ヴェリテがイバルの言葉を遮り、今度は、ぎゅう、とそいつに抱きついた。いきなりのにイバルは真っ赤になって、だけど直ぐにヴェリテを抱き締め返した。

「ヴェリテ、？」

『やっぱりイバルはわたしのお兄ちゃんね』

「ヴェリテ、お前…」

僅かにヴェリテの声が震えていた。そう言えばこいつ涙脆かったな、と目の前の双子をじっと見る。二卵性っても双子なんだよな、こいつら。イバルは分かっていたはずだと言ったけど、お互いのことをちゃんと分かってるじゃねえか。

『バカでシスコンでドジで』

「う」

『単純でプライド高くてすぐ人を信じちゃうけど』

「…」

『でも、それでも、あなたは唯一無二の家族だから、ずっと好きだった…』

その言葉にイバルは目を見開く。思えばヴェリテはただの一度だって自分の口からこいつに好きだなんて言ったことはなかった。けど伊達に双子じゃねえんだ。イバルだって本気で嫌われてた、なんてことはとは思ってなかっただろう。

「…ああ、ヴェリテ」

それでもイバルは嬉しかったんだろうな。ぎゅ、とヴェリテを抱き締める力を強くした。だから落ち着けて。兄妹じゃねえかよ。

「好きだ、ヴェリテ」

『わたしもよ、イバル』

だがそんなやり取りを聞いたら俺の中で何かがキレたわけで。

「っだー！！何お前ら！！兄妹そろって俺をいじめてるわけ！？」

そう言えばヴェリテは舌を出して涙を拭う。イバルも何故かドヤ顔。俺は一瞬で悟った。

「あ、そう…からかったのな……」

なんか俺だけ惨めじゃねえ？よく考えたらヴェリテがからかうの好きなんだからイバルだって同じ可能性あっただろ。

『ごめんね。あまりにも反応が面白かったから』

「仮にも義兄の俺に嫉妬するとは…」

「うるせーよ！！つか義兄ってなん…いや確かにそうだけでも！！」

その言動からして認めてくれたことは確かだろう。クスクスと笑う

ヴェリテに俺はばつが悪くなり、顔を反らした。それからイバルが作った料理を三人で食べ、少しの間、話をしてから帰ることにした。

「もう帰るのか？」

『ええ。仕事があるから。またそのうち来るわ』

見送るイバルに垂れた犬耳が見えたのは気のせいだろう。

「こ、今度は！！」

『ん？』

「俺が、行くから」

笑って言ったイバルにヴェリテは驚いたが、すぐに嬉しそうに微笑んだ。まあ今日はふたりにからかわれたけど、結構楽しかったしよしとしますか。あーでもやっぱりからかわれるのはムカつくなあ。後で仕返ししてやるから覚えとけよ。

ふたつでひとつの繋がり

確かに繋がってる、って感じだな

（え、ちょ、か、帰ってきていきなりなにするのよ…っ）

（俺をからかった罰？）

（なっ！！わたしだけじゃないわよ！！）

（でも発端はヴェリテだろ？）

（だ、だけど！！）

（いーから、黙って鳴け）

（やっ、ん、っ…）

あとがき

イバルがお兄ちゃんらしく、というリクエストでしたが、お兄ちゃんらしくできてるか不安すぎてどうしよう↑

その前にアルヴィン不憫すぎてごめんなさいorz

からかうのが大好きな設定だったんで大いに使ってみましたその設定。

あとイバルの口調が迷子（笑）

取り敢えず三人のほのぼのを書いて満足です（＾p＾）

そして最後の最後であんなですみませんほんとそーゆー思考なん  
dげふんげふん↑

R18も書いたんだけどタグ付いてないからあげれないよなあ（  
ω・ゝ・）

2011. 11. 05

月詠輝夜

ゆめいろきみいろ

あなたの色と

わたしの色が

混じりあって――

いつものようにわたしは仕事場で balan さんのお手伝いをしていた。少しずつ、少しずつだけどわたしたちの研究も世界の役に立って来た。時間を見れば結構な時間を研究に費やしていたため、わたしは勝手場に立ち、お茶を淹れる。

『balan さん、少し休憩しませんか？』

「ん？ああ、そうだね。ありがとう、ヴェリテちゃん」

『いえ』

にっこりと笑ってお盆に乗った湯飲みを持った。瞬間、気持ち悪さが込み上がってきて、ガチャン、とわたしの手から湯飲みが滑り落ちる。

「ヴェリテちゃん!？」

『は、う…っ』

わたしは口を押さえて慌てて洗面所へ駆け込む。

『っ、ごほっ、は、は…っ』

最近無理しすぎたから風邪かしら、と息を整える。そう言えばさっき湯飲みを割ってしまったことを思い出して急いで仕事場へ戻った。



『すみません、 balan さん!』

「いいいいいよ、気にしないで。それより、イル・ファンの病院行こうか」

へ? 病院? とわたしは首を傾げる。しかし balan さんはにこにこと笑うだけで、わけも分からないまま彼に連れられてイル・ファンにやって来た。久しぶりに来たここは、以前と違って明るく光が差していた。

「おめでとう、ヴェリテ」

『――は?』

そう言うジュードにわたしが顔をしかめると溜め息を吐かれた。え、なんでわたしが溜め息を吐かれなきゃならないのよ。

「はい。まずは自分の体に出た症状を挙げてみて?」

『症状? えーと、…熱っぽい。食欲が無い。吐き気。頭痛…かな?』

言い終わったところで、ん？、と眉を潜める。

「じゃあ月のものは来てる？」

『あ……来て、ない……』

「もう、わかるよね？」

わたしは口元を覆うように両手を当てる。嘘だと思ってても嘘じゃない。なぜだか自然と瞳から温かいものが溢れてきた。ガッ、とジュードの白衣を掴んで、わたしは泣く。

「よしよし」

『ふえ、っジュードお……！』

嬉しくてたまらなくて、わたしはボロボロと涙を流す。ジュードは優しくわたしの背中を擦ってくれた。別にそう言う知識がないわけじゃない。結婚のこともそうだったけど実際そうなるまで実感が湧

かないものだ。このお腹の中に新しい生命がいるなんて、何だか不思議な気分。

「あ、どうだった？ヴェリテちゃん？」

『えと、その……妊娠、してたみたい、です……』

泣き止んで廊下へ出れば、ずっと待っていてくれたのか balan さんがいた。彼はやっぱりか、と確信したように笑って言う。分かってたなら言っただけかなあ。

「これからは無理せず定時に帰っていいからね」

『えっ！そ、そんな、大丈夫ですよ！！』

帰る途中、そんなことを言われて慌てて手と首を振る。ただでさえ毎日が忙しいのに気を使わせるわけには行かない。世界中の人たちに認められるには成果が必要。だから少しでも役に立ちたい、とそう思っていたら何故か目の前にアルフレドがいた。めっちゃ息を切らして。

『ア、ルフレド…?』

「 balan から、お前が、た、倒れたって、聞いて……歩いてて平気なのか!?! 倒れたときどこか打ったりしなかったか!?! どこも痛くないか!?! それにそんな薄着して!!! 」

『変態っ!!!』

ガシッと肩を捕まれてから身体をまさぐられてわたしは鉄扇を降り下ろす。なんでアルフレドがここにいるのよ。ってか倒れたって何と、踞るアルフレドの隣を見れば、balan さんが満面の笑みを浮かべて立っていた。成る程、balan さんの仕業か。いつの間に連絡したんだか。

「ヴェリテちゃん、今日はもう上がっていいよ。僕はまだ仕事があるから帰るね。それじゃあまた」

『え、ちよ、balan さん!?!』

引き留める間もなく balan さんは行ってしまった。わたしも仕事残ってたのに、いいのかな。なんか淒く気が引ける。

『アルフレド、仕事は？』

「ヴェリテが大変だったつたらもう上がっていいって言われた」

仕方なく彼を振り返って見れば、殴られた場所を擦りながら答えた。  
何と言うか、心配してくれるのは嬉しいけど、仕事も大切にして欲しいなあ。

「で、結局どうなの」

『あーうん。ちょっとここじゃ言い憎いから、家、帰らない？』

笑うわたしを見て心配そうな顔をするアルフレド。ちょっと焦らすくらいいいわよね。隣を歩くアルフレドをちらりと見て、そ、と手を繋いだ。

『ただいまー』

「ただいま」

やっと帰ってきたわたしたちはリビングへと足を向ける。持っていた鞆を下ろすと、ひよい、とアルフレドに抱えられた。

『きゃあ!?!』

「おお、今日は可愛い声♪——待て待て鉄扇構えんな」

そのままアルフレドはソファーに腰を下ろし、わたしは彼の膝の上に座らされる。しかも向かい合わせで。なんだこれ恥ずかしいんですけど。

「はい、教えて」

『いきなりですか』

「だって——心配で心配で仕方ないの」

じつ、と彼の鳶色がわたしを映す。わたしはそれに引き込まれるようにアルフレドの唇にキスを落とした。何度も、何度も、角度を変えて、愛おしさを込めて。

「っ、なに。誘ってんの？」

ニヒルに笑うその口に、もう一度唇を重ねて、わたしはアルフレドに抱きつく。

「…どうした、ヴェリテ」

『……うん。アルフレドに、言いたいことあるの』

ぎゅう、と力を強くすれば、アルフレドも同じように抱き締めてくれた。

「なに、ヴェリテ……」

『あの、ね……………ん…………た』

「は？」

聞こえなかったのか、聞き返してくるアルフレド。なんか段々恥ずかしくなってきた。でも言わなきゃ、よね。わたしは覚悟を決めて身体を離して、彼とおでこを合わせる。

『赤ちゃん、出来た…』

「……………は？」

抜けたような声でわたしは頬を真っ赤に染める。もう言わないから、と目を反らせばそのまま口付けられた。滑り込んできた舌は、わたしの舌を捕らえて逃さない。僅かに出来た隙まで息を吐けば、わたしの腰を抱く力が強くなる。

『はあ、あ、…ふあ…んっ』

「ん、は…っ」



荒々しさの中にもちゃんと優しさがあったわたしはただただそれに  
応えようと必死になる。やがて苦しくなってきた頃、名残惜しい銀  
色の糸を引いて唇が離れた。

『アルフレド…っ』

「あーやべー、めっちゃ嬉しい…っ」

こつん、と再び額を合わせてわたしたちは視線を交わす。彼の鳶色  
の中にわたしの翡翠があるのがハッキリと見える。

『ほん、と…？』

「当たり前だろ。今にでもお前を抱き上げて、はしゃぎ回ってえ」

『…ふふ、想像出来る』

あの場で言ったらされてたな、とわたしは笑う。ぐい、と引っ張  
ってわたしを膝立ちさせ、アルフレドはわたしのお腹に耳を当てる。

『まだ聞こえないわよ』

「それでもいい……ここには新しい生命があるんだ。俺とヴェリテが生んだ、小さな命……」

『うん…そうだね……』

そつとアルフレドを優しく包むと、確かにウズウズしてる感じがする。ほんとに喜んでくれてるってことが分かって、それがまた凄く嬉しくて。わたしは涙を流し、小さく、ありがとう、と呟いた。

ゆめいろきみいろ

もうわたしひとりの身体じゃない。

この命はわたしたちで守らなきゃ。

(どうしようヴェリテ俺めっちゃ誰かに言い触らしてえ)

(ちよっとは落ち着きなさい)

(いや、だって俺たちの子供だぞ!!絶対ヴェリテ似で可愛いよな  
!)

(あら、アルフレド似でカッコイイかも知れなくてよ)  
(もうお前が可愛い)

妊娠発覚編です(＾0＾三＾0＾)

balanさんはよくわかってらっしゃる!! あんまり balanさんとの  
絡み書いてないなー(ー”ー;)

ってかジュードってそう言うのもやるのかな:ドキドキ↑

まあ別にいいよね! 泣き付かせたかったってこともあったし(＾p  
　　^)

あ、妊娠の症状とか間違ってます、よね? ソワソワ

一応軽くは調べました、当たり前前に経験ないですから:

そしてやっぱりヴェリテは誘い受けじゃないかと思うんですね、はい  
そのままアルヴィンに喰われ:げふんげふんなんでもないです↑

この前に R18 を書きましたが、タグ付いてないんで載せれないで  
すよね(・ω・、)

ってことでこちらに載せました。

ご閲覧は自己責任となります。

<http://id38.fm.jp/248/varrelia/index.php?module=viewbook&amp;>

a c t i o n || p p g & a m p ; s t i d || 1 8 & a m p ; b k i  
d || 1 0 5 2 2 4 8 & a m p ; b k r o w || 0 & a m p ; p w || &  
a m p ; b k p w || & a m p ; s s ||

2 0 1 1 . 1 1 . 0 9  
月詠輝夜

## ユーフォリアの音色

トクン、トクン、と

わたしの心を踊らせるのは

何気ない小さな幸せ

トントントン、と台所からリズムのいい音が聞こえてくる。わたしはリビングのソファアに座って、そ、とお腹を撫でた。あれから五ヶ月と半月が経った。妊娠が発覚したのが三ヶ月。つまり後約半月でこのお腹の中の命が生まれる。やっぱり実感ないな、と小さく笑う。何度かイル・ファンへ定期診察に行っていた。生まれてくるのは双子だそうだ。男の子か女の子かは聞かなかった。

『アルフレドー』

「はいはい、もう少しでできるから待ってなさい」

『はーい』

お腹減ったなー、とわたしが窓を見やると、丁度シルフモドキがやってきた。窓を開けて招き入れると、わたしの肩に止まってすり寄ってくる。ありがとう、と背中ของポシエットに入った手紙を取って、代わりに送る手紙を入れる。お願いね、と笑えば、まるで返事をするように小さく鳴いて飛びだって行った。

「誰から？」

『ジュードせんせーから。えっとね…あ、今日何曜日だったけ？』

「火曜日だろ」

『じゃあ今日みんな来るわよ』

は？と首だけ振り返ってわたしを見るアルフレド。だって手紙にそう書いてあるんだもの。数年前、一緒にこの世界を旅したメンバー

が遊びに来る。それだけでわたしの頬は緩みっぱなしだ。

「まーた邪魔しに来んの？」

『邪魔って何よ』

「俺とヴェリテの甘ーい休日を」

言いながら笑う彼に小さく溜息を吐いた。最近はずっと家でいるから、夜はいつも一緒にいるじゃない。やがて食事が出来たみたいで、アルフレドはお皿に盛りつけた料理をリビングに持ってきた。直後、家のインターホンが鳴り、彼は少しばかり眉を潜める。

「どーせジュードたちだろ」

『わたしが出てくるわ』

「いいよ。お前はそこで待ってろ」

優しく頭を撫でられ、わたしは素直に頷く。そう言えば子供が出来たって言うってからアルフレドはいつも以上に心配性になった。わたしの体調を一番に気遣ってくれたり、たまに仕事の合間にわたしに

会いに来て様子を聞いたり。心配しすぎ、って言ったら落ち込んだ彼はなんだか可愛かったな。

「ヴェリテーっ！」

『久しぶり、レイア』

パタパタ、と足音が聞こえてきて、一番にリビングにやってきたのはレイア。わたしのお腹を見て目を輝かせていた。

「ふおおおお…！ほんとにお腹おっきい…！」

「あ、レイア、ずるいです…！」

続いて来たのはエリー。おいで、と手招きすれば嬉しそうに駆け寄ってくる。

「もうこんなに大きくなっていたんですね…！」



『ふふ、そうよ。あつという間だったわ』

エリーとレイアはわたしの両側に座り、触っていい？、とうずうずした様子で問いかけてくる。頷けばおずおずとお腹に手を伸ばして、優しく撫でてくれた。そして最後にジュードとローエンがわたしの傍にやって来る。

「ヴェリテ、調子はどう？」

『あら、ジュード先生。とても良くってよ』

先生なんてやめてよ、とジュードは微かに頬を染める。

「ほっほっほ、少し見ない間にさらに綺麗になりましたね、ヴェリテさん」

『やだ、ローエンも相変わらず素敵よ』

久しぶりにみんなが集まった。あの旅が凄く懐かしい気がする。少し前までは一緒にいるのが当たり前だったのに。

「ねえ、もうすぐ産まれそう!？」

『あと半月くらいかしら』

「半月…! 楽しみですですね! 男の子ですか? 女の子ですか? それとも両方ですか?」

「ヴェリテが産まれてからの楽しみだーって聞いてねえんだってさ」

アルフレドがわたしの頭を軽く叩いて言えば、気になるー、とレイアは足をじたばたさせる。その時、微かにわたしのお腹が鳴って、少しばかり食事の時間をもらった。食べながらもみんなと会わなかった分の話をする。

『あ、動いた…』

そんな中、違和感を感じてふと呟けばレイアとエリーが真っ先にわたしのお腹に手を当てる。

「わわわわっ！動いてる…！」

「不思議、です…」

ほう、と感嘆の息を吐いて二人はお腹を撫でてくれる。

「ちょ、あんまり触んなっ俺まだ触ってない…！」

「レディたちに嫉妬は醜いですよ、アルヴィンさん」

自分も、とわたしに手を伸ばすアルフレッドだったが、ローエンに言われて言葉を詰まらせる。

「アルヴィンはいつでも触れられるじゃないですか！わたしたちはなかなか会えないんですからっ」

「そーだよね！今日は嫌と言うほどヴェリテに触れちゃうよー！」

ヴェリテ、とレイアはわたしの腕に絡み付いてくる。するとジュードが呆れるように彼女を見て溜め息を吐く。

「レイア、ストレスになるようなことはしちゃダメだからね」

「んもう！！相変わらずジュードは心配性なんだから！大丈夫だって！！ね、ヴェリテ！」

『ふふ、勿論。今日は思いっきり甘えてもいいわよ。ほら、エリーも』

そう言えば、やったー！、と反対側の腕を組んでくるエリー。まるで妹のようなふたりを愛おしそうに見つめると、アルフレドが後ろから抱きついてきた。

「アルヴィン、邪魔です」

「お前らだけずりーの。俺だってずっと我慢してたのに」

『いい加減になさい』

ぐ、とエリーがアルフレドを押し退けるが彼は離れようとしないう。まあ実際最近は一緒にいただけのことが多くて、お互い触れることもあまりしなかった。

「アルヴィンさん、ヴェリテさんが嫌がってますよ」

「嫌がってねーよ」

『嫌がってるわよ』

にっこりと笑えって言えば部屋の隅に踞るアルフレド。今日は旅してた時みたいにみんなと一緒に過ごしたい。久しぶりにジュードのご飯も食べたいし、ローエンの淹れたハーブティーも飲みたいな。レイアとエリーと沢山話して、それから――ミラと、笑って。

『そっか……足りないんだ』

「え？何が？」

『……ううん、何も』

忘れてたわけじゃない。ただ改めて思うと凄く寂しくなってくるんだ。この中にミラがいて、初めてこの心が埋まってくれる。今はもう会えないから、ずっと穴が空いたままかな。

——ねえミラ、わたしもうすぐママになるのよ。そうしたらお祝いしてくれる？一緒に喜んでくれる？この子たちを、守ってくれる？

『ミラも見せてくれるかなあ』

「うん、きつと」

ジュードが言ってくれどなんだかほんとにそんな気がする。今も  
凄く幸せだけど、もう一度、あの頃に戻りたいなとも思いながら、  
そ、っと右手の指輪に触れて、わたしは笑った。

ユーフォリアの音色

みんなの光が、凄く温かい——

（ね、名前は！？）

（ふふ、秘密よ）

（えー！ヴェリテの意地悪！）

（わたしはいつもこうよ、レイア）

（元気に産まれてきますように）

（ありがとう、エリー）

（絶対可愛い子だと思います！！）

（この子たちが産まれたらエリーはお姉さんね）

（お姉さん…！はいっ）

（じじいはひいしじいですか…長生きはするものですね）

（あら、まだまだローエンには長生きしてもらわなきゃ）

（おや、勿論そのつもりですよ）

（相変わらずね、ローエン）

（ヴェリテさんこそ）

（なんかあったらちゃんと病院に来なきゃダメだよ？）

（わかってるわ、ジュードママ）

（だからママじゃないってば！）

（心配してくれて嬉しいわ）

（…もう、ヴェリテったら）

（ヴェリテ、構って）

（もうちょっと我慢なさい）

ちょっと書いてみたほのぼの日常（＾p＾）  
みんなヴェリテの心配して会いに来ました！

アルヴィンは子供がお腹にいるからという理由でヴェリテに構って  
もらえてないんですね↑

そんな中みんながヴェリテに引っ付いてればいいんだ（＾p＾）  
完全なアル憫、

もうすぐ産まれますよー！！↑

ジュード↓ママ

ミラ↓パパ

ヴェリテ↓長女

レイア↓次女

エリーゼ↓三女

アルヴィン↓長女の旦那

ローエン↓お爺ちゃん

あれ、アルヴィンだけ仲間外れのような？…まあいいか（＾0＾三  
＾0＾）↑

2011. 11. 13

月詠輝夜





## この手に抱くふたつの愛色

舞う雪のように

ふわり、ふわりと

舞い降りたふたつの灯火――

船がイル・ファンに着いた途端、俺は一目散に病院を目指した。ヴェリテが、大丈夫だから仕事行っただけ、とにっこり笑って言うもんだから仕方なく仕事に行った俺だったが、その五時間後、ジュードから急ぎの連絡があったのだ。今朝、ヴェリテの笑顔に負けて行ったのが間違いだった。今日は大事な仕事があつて、それをヴェリテも知っていたんじゃないだろうか。平然としていたが凄く辛かったに違いない。

「あの馬鹿……っ」

ジュードによれば、今朝の時点で不規則ではあったが一時間に五回ほどの痛みがあったらしい。それから数時間後、五、六分置きに痛みが来て、今までと痛がり方も違ったそうだ。纏めなくても分かるだろうが、産まれるってことだよ！

俺が病院に着いたとき、出迎えてくれたのはジュードだった。息を整えてる暇もなく俺の腕を引っ張り、早足で分娩室へと連れていかれる。やはり怒っているのだろう。お互い無言で着替えて入れば、苦しいヴェリテの声が聞こえて来た。

「ヴェリテ……っ」

名前を呼べば、消え入りそうな声で俺の名を囁くヴェリテ。額にはうっすらと汗が滲んでおり、辛そうに眉を潜めていた。遅れて悪かった、大丈夫だ、と俺はヴェリテの手を強く握る。

『だい、じよぶ……だから……』

「ああ、わかってる……」

こんなときでもにっこりと笑う彼女が愛おしくて、そっと頬を撫でてやった。

――そして約二十分後、この世に新たに二つの生が誕生した。ヴェリテと同じ銀髪に翡翠の瞳をした男の子と、俺と同じ焦げた茶色の髪に鳶色の瞳をした女の子だ。

『可愛い……』

分娩室から病室に移動したヴェリテは、両側の小さな揺りかごで眠る双子を見て嬉しそうに笑う。さながらその表情は、母親、と感じさせられた。俺はと言えばジュードにこっぴどく叱られたんだが。でもやっぱりヴェリテが庇ってくれて、俺情けねえな、と肩を落とした。

「名前、どうするよ」

『ふふ、実はもう決まってるの』

は？と抜けた声を出せば、ヴェリテは双子の頬を優しく撫でた。

『男の子は、アルベルト』

「！」

『女の子は、ウェスタ』

あ、と小さく声を上げる。今俺の中にはなんとも言えない感情が渦巻いていた。俺は不思議そうに見るヴェリテから目を反らす。

『変、かしら。アルフレドとわたしの名前から取ったのだけれど…』

「いや、そうじゃなくて……ただ、俺も同じような名前、考えてたから」

同じような、じゃなくてまんまなんだけど。もし男の子と女の子の双子が生まれたのなら、この名前がいい、と一人ではしゃいでいた

のがまだ記憶に新しい。

『アルフレド、抱いて』

「は！？おまっ何いっ……ああ、子供をね……」

『バカ』

仕方ねえだろーが。暫くお前に触れられてねえんだから。口を尖らせて言えば額を小突かれた。すみませんね、俺の脳内こんなんで。

『はい、パパ』

「！　　パパ、か……」

俺はヴェリテの腕からアルベルトと名付けられた男の子を抱き上げる。すやすやと眠るその表情は確かにヴェリテに良く似ている。

『二卵性双生児ですって』

「アルベルトはヴェリテ似だな」

『ウェスタはあなた似ね』

髪の色から瞳の色までそっくりで、ああ、俺たちの子なんだな、と改めて思うと何だか自然と頬が緩んでくる。小さな手のひらがギュッと俺の指を掴む。

「赤ん坊ってこんなに小せえんだな……」

『ええ……だからこそ親であるわたしたちが守らなくては』

「そうだな。これから沢山色んなものを見て、色んなことを学んで行く。俺たちが築いた未来で、こいつらは生きるんだ」

まだまだ世界には認められないことばかりだ。でもヴェリテやジョード見たいに諦めないやつがいるから世界は変わっていくんだと思う。

『ミラ、見てるかな……』

「ちゃんと近くにいるさ、きつとな」

『うん……』

わたしママになったのよ。そうやって、まるでミラに報告するように呟くヴェリテの姿はもう見慣れた。例え離れていても心は繋がっているんだ、と彼女はいつも笑う。そしてそれに応えるかのように、開いた窓から優しい風が吹き付けた。

『あ、いい風……ミラかな』

「祝福してくれてんだろ」

ふわり、と下ろしたヴェリテの髪が風で揺れた。日に照らされてキラキラと光る銀髪に目を惹かれる。ああ、女は子供を産むと綺麗になるって言うが、間違いねえな。今のヴェリテはいつも以上に綺麗だ。

「ヴェリテ」

『ん?』

「愛してる」



そう愛しさを込めて囁けば、久しぶりに真っ赤に顔を染め上げるヴェリテ。少しでも目を泳がせてから、わたしも、と彼女は微笑む。とびっきりの笑顔で。俺たちの腕の中で、子供たちも笑った気がした。

この手に抱くふたつの愛色

優しく、暖かい新たな生命――

よく、分かんない（^0^三^0^）

例のごとく当たり前に経験ないから色々すっ飛ばしました↑

漸く双子が誕生しましたよっ！

沢山のアンケートご協力ありがとうございました、

取り敢えず名前は変換ないのですが、あったほうが良いですかね？  
アルヴィンもヴェリテもこれから親ばかになって行くんですよ、き  
つと！

あとはPTメンバーとの絡みも書きたい（＊／ノ）

ただ、妄想はあるんですけど文章に出来ないとゆーね！

誰か文才分けて下さい（´ーω´）

次回もお楽しみにっ

## 愛しき天使たち

大変だけど

でも新しい生活が

とても幸せ――

子供が生まれて、わたしたちは育児に追われる毎日だった。仕事が忙しいのにわざわざ定時に帰って来て面倒を見てくれるアルフレド。でも何故か彼が子供たちを抱くと泣いたり暴れたりするのだ。正直わたしもそれには困っていた。

「「うああーっ!」」

「ちよ、アルベルト、ウエスタ：！」

食事の準備は寝ている間に出来たのだが、片付けの時はそうはいかない。家事はわたしの仕事だから、とアルフレドにふたりを任せただが、さっきから泣いてばかり。

「おいヴェリテ、なんとかしてくれ：っ」

『：しょうがないなあ』

まだ途中の食器を残し、わたしはリビングへと向かう。彼の腕の中のアルベルトを抱き上げれば、ピタリ、と泣き止んで笑顔になる。

「っこいつら俺になついてねえ：」

『あはは：』

未だ泣いているウエスタを見てわたしは苦笑いをする。寝かせられればアルフレドが抱いても大丈夫なのだが、いつもこうだと外も出歩けない。

「ウェスター…」

「あー！」

「いてっ」

ばしっ、と小さな手で彼の頬を叩いたウェスタ。ああ、ほんとなつてないな。パパってことが分かってないのだろうか。

『わたし面倒見るからさ、アルフレド、食器任せて良い？』

「ああ、分かった」

彼はそっとウェスタをソファーへ下ろし、肩を落として台所へ行った。めっちゃ寂しそうだ。その背中を見てそう思った。わたしはソファーへ座り、ふたりの頬を優しく撫でる。

『もう…』

「あ、あー」

『んー？』

ぎゅう、と撫でていた人差し指をアルベルトが掴んだ。そんなちよつとした仕草でも可愛いなと思うわたしは親バカかしら。笑って指を動かせば、さっきまで泣いていたアルベルトも笑顔になった。

「あーもー、なんでヴェリテの時は泣かねえんだよ」

『赤ちゃんは人の気持ちを汲み取りやすいのよ。なんか疚しいことでも考えてたんじゃなあい？』

「考えてねーよ！！」

あはは、と笑えばアルフレドは口を尖らせる。でもこのままじゃアルフレドにふたりを任せられないし、どうにかならないかしら。

「なあ、もっかい抱かせて…」

『はい、ウエスタ』

わたしの腕から彼の腕へ移すが、途端に泣き出すウエスタ。あ、へこんだ。ものつすごいへこんでる。

『アルベルトもウエスタもどーしてパパに抱っこされたら泣いちゃうの?』

「「だー?」」

『ママに教えて?』

「「だっ!」」

するとふたりはペチペチと自分の頭を叩き出した。ああもう、可愛いなあ。シンクロしてるところが更に可愛い。

「「あーうー!」」

『ん? 頭?』

ふい、とアルフレドを見れば、いつもと変わらないオールバックの

髪。…ん？オールバック…ああ、なるほど。

『そっか、パパの髪型が嫌なの』

「「だっ」」

「なにそれ！！オールバックがなんでダメなの！？」

「「だう！」」

どうやらそうらしい。気のせいかふたりの表情がご機嫌なように見える。確かにアルフレドのお風呂上がりの際に抱っこしてもらってたふたりは嬉しそうに笑っていた。なんか、もう我慢出来ないわ。

『ふ、あは、あはははははっ！』

「おま、ヴェリテ、笑うな！！」

『だって髪型で嫌われるなんて聞いたこと無いわよ、ふふふふっ』

「っヴェリテ」



笑いながら、何？、とソファアの背もたれに頭を乗つけて振り返ればいきなり口を塞がれた。呆けていたら、するり、と舌が侵入してきてやっと思考回路が繋がる。しかし頭を強く押さえ付けられて離れることは適わない。

『んんっは、あっア、ルフ、レドっ』

苦し気に彼の名を呼べば、ちゅ、とリップ音を立てて離れる。

『な、な…っ』

「ちょっと黙ろうkあべし！！ぐえっ！」

『あ』

隙あり、とニヒルに笑うアルフレドの顎を泣き出したアルベルトが蹴ったのだ。しかもウエスタまでが暴れだし、足が彼の鳩尾にクリティカルヒットした。何とかウエスタをソファアに下ろし、アルフレドはその場に踞った。

「ぐ、おとおお…っ」

『やだ、ちょ、大丈夫!?!』

「「だー!」」

悶絶しているアルフレドを余所に、ふたりは満足そうに満面の笑みを浮かべていた。

愛しき天使たち

守ってくれた、のかな？

（くっそ、なんで俺ばかり…）

（はいはい。もうふたり寝たから構ってあげるわよ）

（…ヴェリテ、好きだ）

（何を今さら）

（好き…愛してる…）

（ふふ、おっきな赤ちゃんみたい）

（もうそれでいいよ）

（ん、甘えん坊）

嫌われてるアルヴィンパパ（笑）

いつもふたりに振り回されてるんですよ（^0^三^0^）

実はオールバックのパパは嫌いみたいです↑

そしてママを守ろうとする双子たち！悪い（？）パパを成敗しました！！（^p^）

なんか書いてたらギャグチックになってしまったとゆーw

マジアル憫（・ω・、）

2011. 12. 01

月詠輝夜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9119x/>

---

交わる無限の愛色世界～テイルズオブエクシリア～

2011年12月3日15時51分発行